

## アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2014年12月15日（月）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：本土空襲と台湾空襲のあいだ——越境する歴史認識の構築に向けて——

報告者：長 志珠絵（神戸大学大学院 国際文化学研究所教授）



### 発表の構成

序 空襲研究－過去の戦争の語られ方という主題

#### 1. 戦争の語られ方

- 1) 「空襲」研究の立ち位置を探る
- 2) 戦争の死者－空襲死者／空襲被害の意味付けは？

#### 2. 歴史研究としての空襲研究

- 1) 現代史アカデミズムのなかの空襲研究－不在？
- 2) 空襲－どのように語られてきたか？
- 3) どのように語られているか

#### 3. 国境を越える戦争認識は可能か？

- 1) 「戦後史」のなかの空襲の語られ方という視点
- 2) 「帝国」の不在－「台湾空襲」は入っているか？

結び 空襲－空爆の持つ意味の問い方

本報告では、日本の植民地であった台湾における空襲に関して、現在の日本国内でどのような認識があるのかという観点を一つの重要な切り口として、日本における空襲研究の特徴について、過去の戦争の語られ方という問題との関連で論じられた。

具体的には、まず「1. 戦争の語られ方」において、「平和主義」との関連で過去の戦争を語るという戦後日本の戦争の語られ方の一つの特徴について論じた上で、空襲による死者および空襲被害がどのように語られてきたのかを、映画作品などとの関連で具体的に説明された。次に「2. 歴史研究としての空襲研究」では、日本における空襲研究が多くの場合、地域の市民運動と結びついて開始されてきたという研究の特徴について指摘がなされた上で、空襲研究の現状について米軍資料の発掘などとの関連で、どの程度まで広がりをもって深化しているのかが、中小都市空襲に関する研究など具体的な事例をもとに説得的に論じられた。

さらに「3. 国境を越える戦争認識は可能か？」では、日本の植民地であった台湾において1944年から45年に集中した空襲の実態と当時の「植民地防空」政策について、研究の根拠となる資料の発掘状況も含めて説明がなされた。その上で植民地における空襲を射程に入れた研究が、日本における空襲研究の中で非常に手薄である状況について、民衆思想史研究の先駆者である鹿野政直氏の問題提起に引きつけた形で、アジア太平洋戦争をめぐる戦後日本の歴史認識全体にかかわる問題として問題提起がなされた。

(文責：松田 京子)